

地域を結ぶ「木育」から学ぶ

矢野 真
京都女子大学発達教育学部 教授



1. 「木育」による造形ワークショップ

京都女子大学では、京都刑務所と連携協定¹⁾を結んでいる。それを受け、幼児を中心に「木育」の造形ワークショップを行っている発達教育学部児童学科・造形(矢野)ゼミでは、京都刑務所内の作業所で作られる、子どもが使用する木工玩具のデザイン等の連携を引き受けることとなった。それに関連した第一歩として、平成28年に京都矯正展に造形ワークショップを開催した。このワークショップは次年度も引き続き開催され、平成30年度は3回目の実施となった。

「木育」とは、北海道庁の『木育(もくいく)』プロジェクト(平成16年9月)から端を発しており、「木に触れ、木に学び、木と生きる」といった、木とのかかわりを通して、自然の一部として多くの生命と共存しながら生きていることを実感し、未来へつなげる取り組みである。8年ほど前からこの「木育」に着目し、保育現場に木を使った活動を取り入れることを行っており、京都女子大学の発達教育学部児童学科の1年生から3年生までの授業計画において積極的に取り入れている。そのため、ゼミ以外での授業の中で、子どもの木のおもちゃ



づくりを行っており、細かい仕組みや大きな作品に挑戦するなど、保育者養成の授業作品としては、かなり高いレベルの作品もみられる。

京都刑務所との連携は、そもそも造形ゼミへの依頼の際、「木育」をテーマとした京都刑務所内の作業所でつくられる、子どもが使う木工玩具のデザインの提案、及び刑務所が主催する「社会を明るくする運動」行事に造形ワークショップを企画することが連携の主体であった。連携1年目である平成28年度は、まずは体制づくりの一つとして造形ワークショップ単体での活動となった。そこでは、造形ワークショップにおける大学（学生を中心）と京都刑務所、そして地域住民のよりよい連携を考えることが必要であるということが挙げられた。連携2年目となる平成29年度の「木のトレーづくり」では、単価コストが高く、木地を数多くつくることができなかった。そこで平成30年度は、コストの見直し、また学生からのデザインについての提案（どのような年齢の方々に、どのようなデザインが好まれるのか）等を考慮しながら木地づくりを作業所と相談の上、依頼・制作を行った。ここでは、その平成30年度の取り組みについての詳細を見ていく。

2. 平成30年度の造形ワークショップ（実施内容）

具体的に、本連携事業では樺材を利用した“状差し&ペン立て”を11名の学生（4回生）がデザインし、そのデザインをもとに刑務所（受刑者）に木地の制作を依頼した。その木地を使用して造形ワークショップを行い、地域住民に作品づくりを楽しんでもらうといった内容を検討し、実施した。

開催場所：第41回京都矯正展（京都刑務所）

日時：平成30年10月27・28日の2日間

27日（土）：10：00～16：00

28日（日）：10：00～15：00

内容：学生のデザインによる「状差し&ペン立て」制作（先着400名）

参加学生：矢野ゼミ3・4回生と2回生。21日18名、22日21名

<実施1日目・27日>

“状差し&ペン立て”の制作工程は、参加者が状差しとなる箇所を自由に決め、鋸を使って切り込みを入れる。そして、用意した鉋（かんな）や木工やすりを使って角を丸め、最後に紙やすりを使って仕上げるといった工程である。



鋸で切り込みを入れる



鉋で角を落とす

実施1日目、14時頃には200個用意した“状差し&ペン立て”の木地がなくなってしまったため、2日目の木地から40個ほど追加したが、15時にはすべてなくなってしまった。無料註2)ということも影響し、参加者は多く、楽しく制作に取り組んでいる様子を窺うことができた。参加した学生たちも、普段接する子どもだけでなく、大人との世代間コミュニケーションを楽しんでいる様子が窺われた。

<実施2日目・28日>

1日目に40個追加してしまったため、13時にすべての木地がなくなりました。しかし、参加者の普段あまり手にすることのない鉋を使用することが楽しかった様子が窺われ、盛況であったように思われる。



全体の様子



完成した子どもの作品

3. 造形ワークショップにおける学生の成果

「矯正展」における学生たちの学びの姿について検討するため、ワークショップ終了後に学生に報告書を提出してもらった。その報告書からは、以下のようなことが明らかとなった。

ワークショップは「学生がトレーのデザインを考える」→「京都刑務所の木工部がそれを加工する」→「それを使って参加者（市民）が作品を完成する」という流れで実施されている。そこで、実践の目的に対応し、記述の特徴を①矯正展（ワークショップ）における学び ②作品制作（デザイン）③刑務所や受刑者の印象や理解の視点でカテゴリー化し、さらに矯正展の経験による差異を検討するため、矯正展を初めて経験した3回生（以下1年目）と、昨年に続き2回目の経験である4回生（以下2年目）との記述を比較することとした。

① 矯正展（ワークショップ）における学び

矯正展における学びは、「参加者の理解」と「参加者への支援」「運営を通じた学生同士の学び」に大別することができた。

まず、「参加者の理解」について、参加者の道具の使用についての気づきが述べられている。さらに、年齢層が広いこと（高齢者から幼児まで）や、別のイベントと比較により、対象や環境の違いにより対応を変える必要があることを実感していたことが窺われる。

「参加者への支援」については、参加者とのかかわりを通して制作における支援についての様々な気づきや学びが述べられている。1年目の学生の中には支援に難しさを感じている記述も見られる。これに対して、2年目の学生においては、子どもの主体性を尊重することなど、より教育的な配慮への気づきが述べられている。さらに、支援を通して参加者に矯正展の意義を伝えることの重要性を指摘する意見も見られた。また、また支援を通して自分自身の成長を感じている記述も見られている。

「運営を通じた学生同士の学び」について、学生は企画を運営することを通して、先輩の姿をみたり、学生同士で連携したりすることの重要性を学んでいることが窺われた。また、2年目の学生の中には、今回の学びを次に引き継ぎたいという記述も見られた。

② 作品制作（デザイン）

作品制作に関する事柄については、「デザインについての学び」と「制作の充実感」に大別することができた。

まず、「デザインについての学び」については、参加者の年齢層を踏まえることについての気づきが述べられている。さらに、学生同士が協力することの必要性が挙げられている。2年目の学生の記述において特徴的なこととして、昨年の反省を踏まえ、デザインや工程を工夫し、より対象者に配慮していることが窺われた。

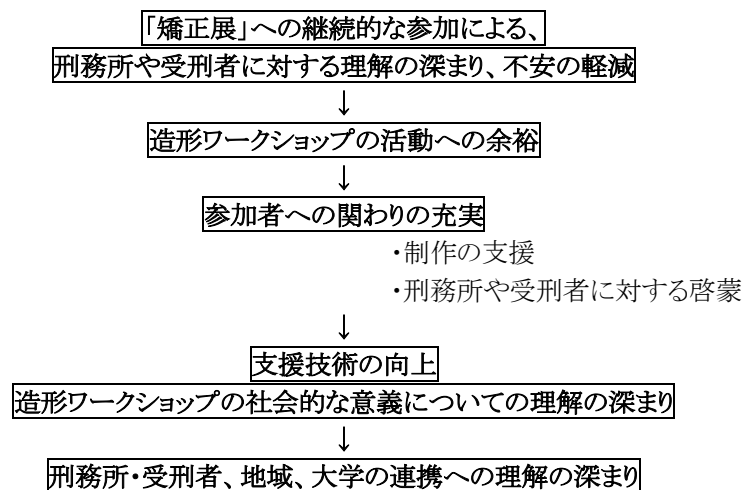
「制作の充実感」については、自分自身のデザインが作品になることや、自分のデザインが認められることにより、喜びや充実感を感じていることが窺われる。

③ 刑務所や受刑者の印象や理解

次に、2年目の学生の記述から、多くの学生が既に昨年参加した時点で刑務所や受刑者についての不安は軽減されており、刑務所や受刑者と連携することがスムーズにできていることが窺われた。その上で、自分自身が刑務所や受刑者について理解するだけでなく、刑務所と地域のつながりが重要であることや矯正展を通じて自らが参加者への理解を促すことの意義を感じていること、そのためには自分自身が刑務所との連携にネガティブな印象をもってはいけなとする意見も見られている。このように、2年目の学生は、昨年の経験を踏まえながらより深くワークショップの意義を理解していると考えられる。但し、不安が完全には払拭できていないことが窺われる記述も見られている。

4. 地域を結ぶ「木育」からの学び

2年目の学生の記述の特徴や、1年目の学生のそれとの比較から、「矯正展」への継続的な参加による学生の成長について、以下のようなことが明らかとなった。



普段は接することのない刑務所の受刑者と“作品を通してコミュニケーションを図る”ことは、地域との連携を考えることはもちろんのこと、造形に自信を持った保育者の育成という視点からも、児童学科が役割を受ける大変重要な連携であったと考えられる。

このように、学生は「木育」による教材の作成や保育への応用、そして様々なコミュニケーションなど多くのことを学び、自己の技能や意識を向上させている様子が窺われた。

新しい元号となった今年度も、この連携の継続を予定しており、刑務所・地域への理解、連携を通じた学生の意識向上、そして「木育」の大切さについて検討していきたい。

註1) 朝日新聞 2016年10月6日 29面(京都市内版)

註2) 本研究は、平成30年度京都女子大学・学まち推進型連携活動補助事業の助成を受けており、その予算で材料等の確保を行った。